国指定史跡 骨寺村荘園遺跡

平成23年度調査概要

平成 24 年 3 月

一関市教育委員会

はじめに

一関市厳美町本寺地区は、中尊寺に残される『陸奥国骨寺村絵図』の現地として著名であり、「日本の原風景」ともいえる農村景観を今に伝えています。鎌倉時代には中尊寺の荘園であったことが、中尊寺の古文書群や鎌倉幕府が編纂した歴史書『吾妻鏡』によって証明されており、その歴史的貴重性から、平成 17 年に国史跡「骨寺村荘園遺跡」に指定され、平成 18 年には「一関本寺の農村景観」として国の重要文化的景観に選定されています。

平成 23 年 6 月には「平泉―仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」が世界文化遺産に登録され、世界遺産登録を目指している骨寺村荘園遺跡についても推進を図っているところであります。

当市ではこの骨寺村荘園遺跡の理解の深化を図るべく調査研究に取り組んでおりますが、今年度は絵図に描かれ、また現在でも現地に残されている不動窟について現状確認調査を行いました。また村の名前の由来となったと考えられる「骨寺堂跡」の確認調査も、昨年に引き続き、実施しています。

本書はこれらの調査成果を広く公開するものでありますが、当市の文化財への興味と関心の高まりや、地域のルーツの解明により、より良い地域づくりの一助になれば望外の喜びです。最後になりますが、調査に際しては地権者をはじめ多くの方々のご協力を頂きました。衷心より感謝を申し上げます。

一関市教育委員会
教育長　藤 堂 隆 則

例言

1．本書は平成 23 年度に一関市教育委員会　生涯学習文化課が実施した骨寺村荘園遺跡に係る調査の概要報告書です
2．本書は一関市教育委員会　生涯学習文化課が執筆・編集しました
3．出土した遺物は一関市教育委員会が保管しています

【表紙】 一関市厳美町字下真坂地内に所在する「不動窟」
鎌倉時代の『陸奥国骨寺村絵図』に描かれた当時から、現在まで変わらぬ姿を保っています

中尊寺と骨寺村

国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』中尊寺蔵

平安時代末、自在房蓮光という僧侶は藤原清衡の命令により紺紙金銀字一切経を完成させました。その功績により、中尊寺経蔵の別当（責任者）に命じられ、蓮光は自分の領地であった“骨寺村”を中尊寺経蔵に寄進（寄付）しました。こうして中尊寺領としての骨寺村は出発します。

中尊寺には、鎌倉時代後期の『陸奥国骨寺村絵図』２枚が残されています。この絵図は当時の本寺地区を描いたもので、中世の農村景観を伝える大変貴重な史料です。

絵図は、鎌倉時代後期に中尊寺と、奥州藤原氏の滅亡後にこの地を支配した葛西氏との所領争いにおける裁判の証拠書類と考えられています。左側の絵図は農家や田圃、川や道路が詳らかに描かれており“詳細図”と呼ばれています。それに対し右側の絵図は“簡略図”と呼ばれ、村を取り巻く山々がダイナミックに描かれています。山々の尾根線を挟み「寺領」と「郡方」と記されており、山々に囲まれた部分が“骨寺村”であったことが分かります。

また鎌倉幕府が編纂した歴史書『吾妻鏡』にも「骨寺」が登場します。源氏と藤原氏との合戦であった奥州合戦が終わった後、中尊寺僧心蓮が頼朝に対し寺の領地を安堵（保障）してくださいとお願いに行きました。すると頼朝はその場で骨寺（東は鎰懸、西は山王窟、南は磐井川、北は峰山堂の馬坂）を寺領として認めました。この際に示された骨寺村の四至（村境）が現在も地名や遺跡として残されています。

不動窟の調査概要

不動窟は『陸奥国骨寺村絵図』（詳細図）で「不動石屋」とともに、図像が描かれています。絵図は鎌倉時代後期に描かれたので、少なくともその頃には存在が知られていたと考えられます。窟は、不動明王信仰に係る施設で、内部には不動明王像が安置されていたと推測されています。

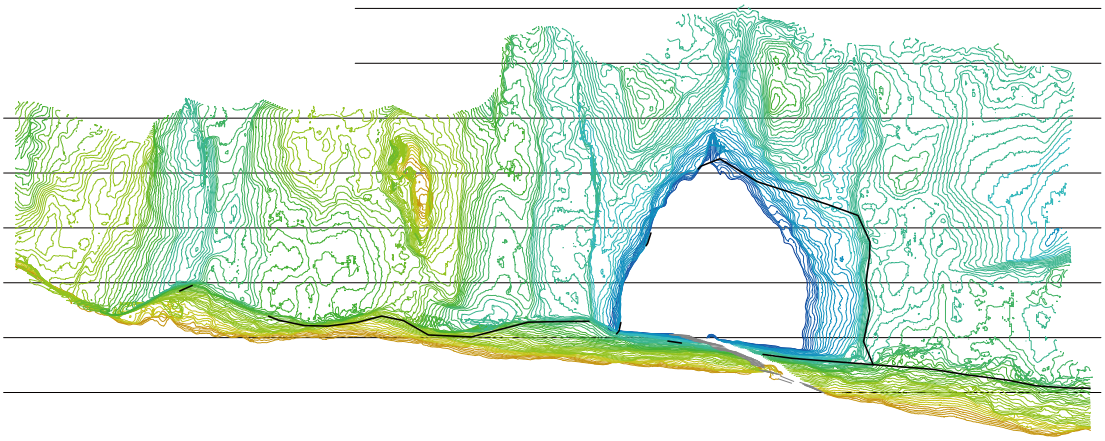
江戸時代後期の『安永風土記』には真坂にあり、「深さ５丈余りの洞窟の中に高さ３丈余りの大石がある。昔から不動窟という。境内やお堂、本尊は無い」と記されています。

不動窟は、絵図にははっきりと描かれているのに、実は史料は大変少なく、不明なところも多いのです。しかし、鎌倉時代の絵図に描かれ、江戸時代を経て、現代にまで受け継がれてきた遺跡であることは貴重で、絵図と現地との比較では定点となる重要な遺跡です。

本年度調査では、窟の現状を確認するために内部の精査と発掘調査、詳細な記録を得るための３次元レーザー測量調査を実施しています。精査と内部確認では、窟の壁に灯明具を置いたと考えられる無数の穴を確認しています。また窟入口を四角く削った痕跡と貫を通したと考えられる穴を発見しました。これらのことから窟はある時期には扉などでふさがれていたことが予想され、内部では火が灯されていたことが想像されます。

発掘調査では、窟の底面を確認しています。底面は平坦ではなく、奥から入口に向かってなだらかに傾斜していました。３次元測量で詳細な図面を作成した結果、窟は直線ではなく、緩やかに湾曲していることが判明しました。これらのことから、もともと自然の洞窟が信仰の空間として利用されたと考えられます。

絵図に描かれる不動窟　「不動石屋」と記されている



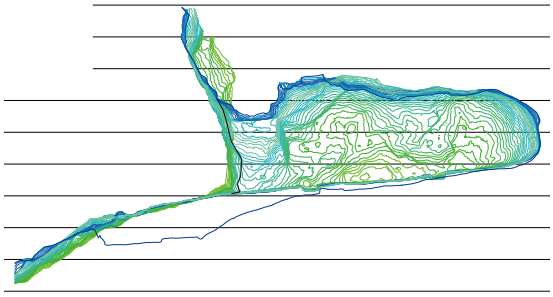
３次元レーザー測量による実測図

窟の壁面に穿たれた灯明具を置くための穴

窟入口の加工痕

窟内部の発掘調査状況

窟入口部の発掘調査の状況



不動窟西側側面図

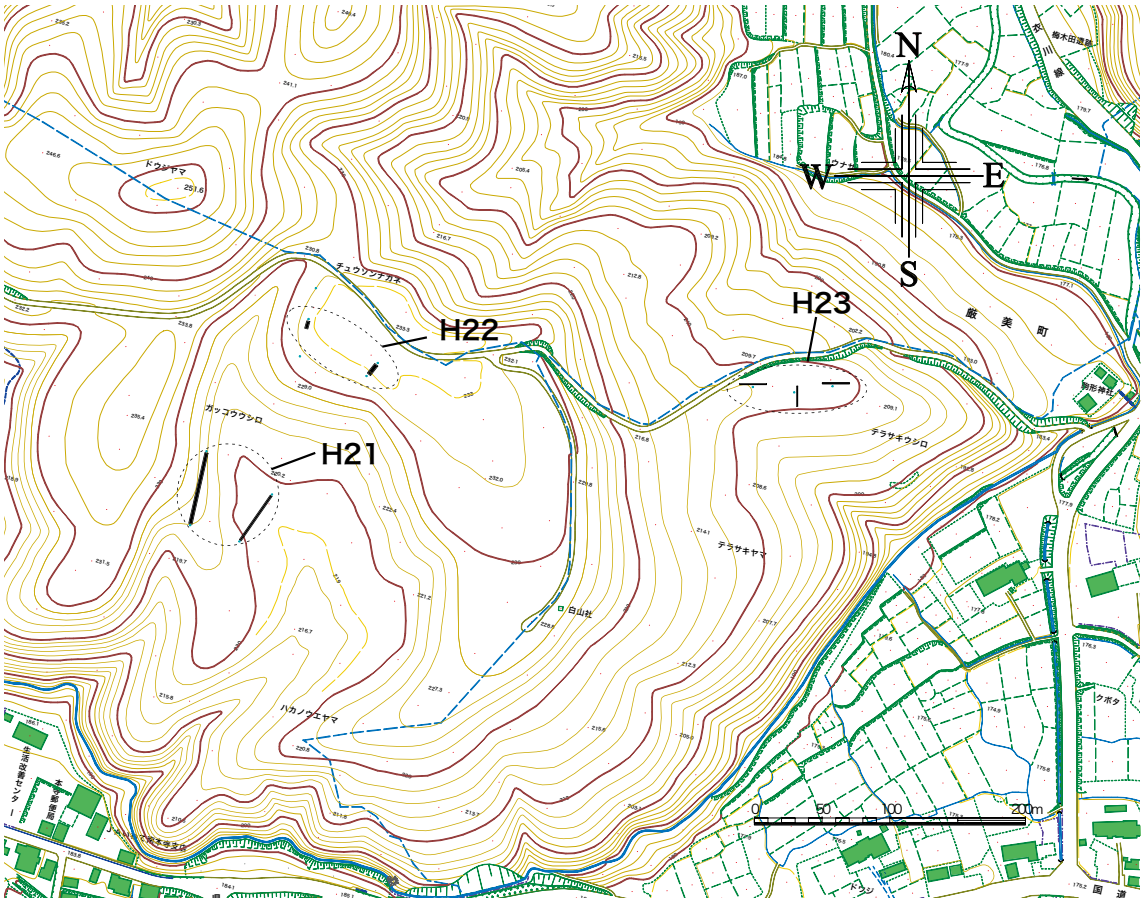
３次元データによる CG
真上から見た不動窟

平泉野台地の調査概要（厳美町字駒形５番地点）

平成 21 年度より『陸奥国骨寺村絵図』に描かれる骨寺堂跡の痕跡を確認するため、継続して発掘調査を実施しています。平成 21 年度には平安時代中期の土器が出土しており、平成 22 年度はその上段の平場の調査を実施していますが、骨寺堂跡の手掛かりは得られていません。

平成 23 年度は、平泉野台地の中でも集落に近い東側の尾根上に調査区を設定し、発掘調査を実施しました。尾根上の地層の堆積状況を確認するため東西に長い調査区を設定しています。発掘調査の結果、縄文時代前期から中期（約 7500 ～ 4500 年前）を中心とした土器と石器が出土しています。発見した遺構は、浅く掘りくぼめられただけの穴で、どのような目的で使われたかは不明ですが、周辺からは石器を作った際の石のカケラ（剥片）が出土しています。これらからは昨年度に確認されたように、平泉野台地上が狩猟採集の場となっていたことが考えられます。

今年度調査からは平泉野台地一帯が縄文時代を通じて狩猟や採集の場となっていたことが想像されましたが、骨寺堂跡については不明な部分が多く残ります。継続した調査と共に、範囲を広げた調査が必要となります。



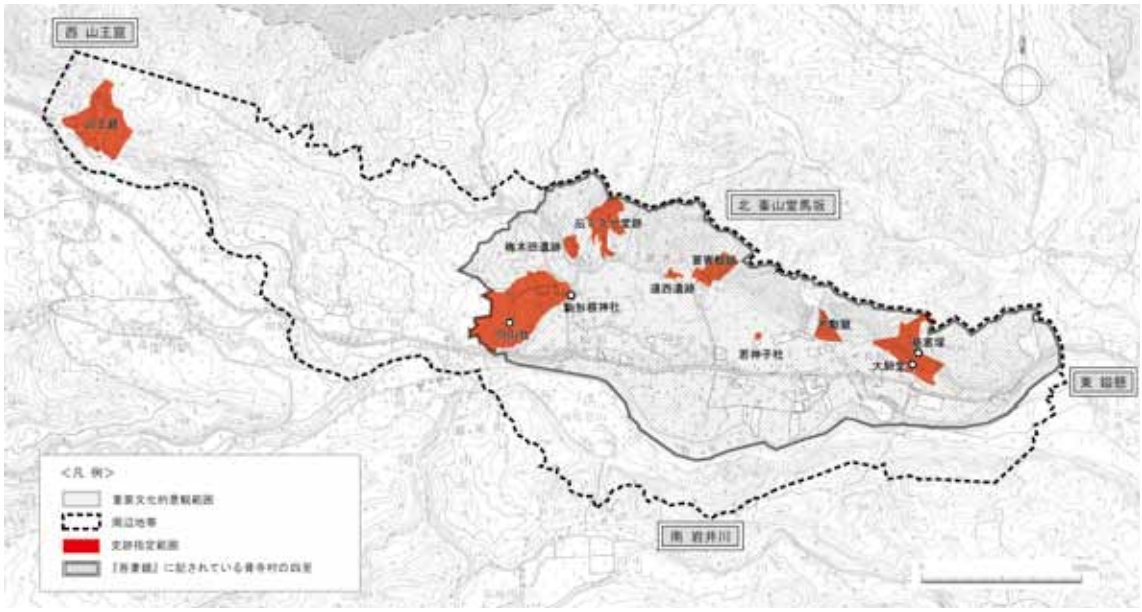
平泉野台地発掘調査位置図（平成 21 ～ 23 年度）

西側調査区の全景写真

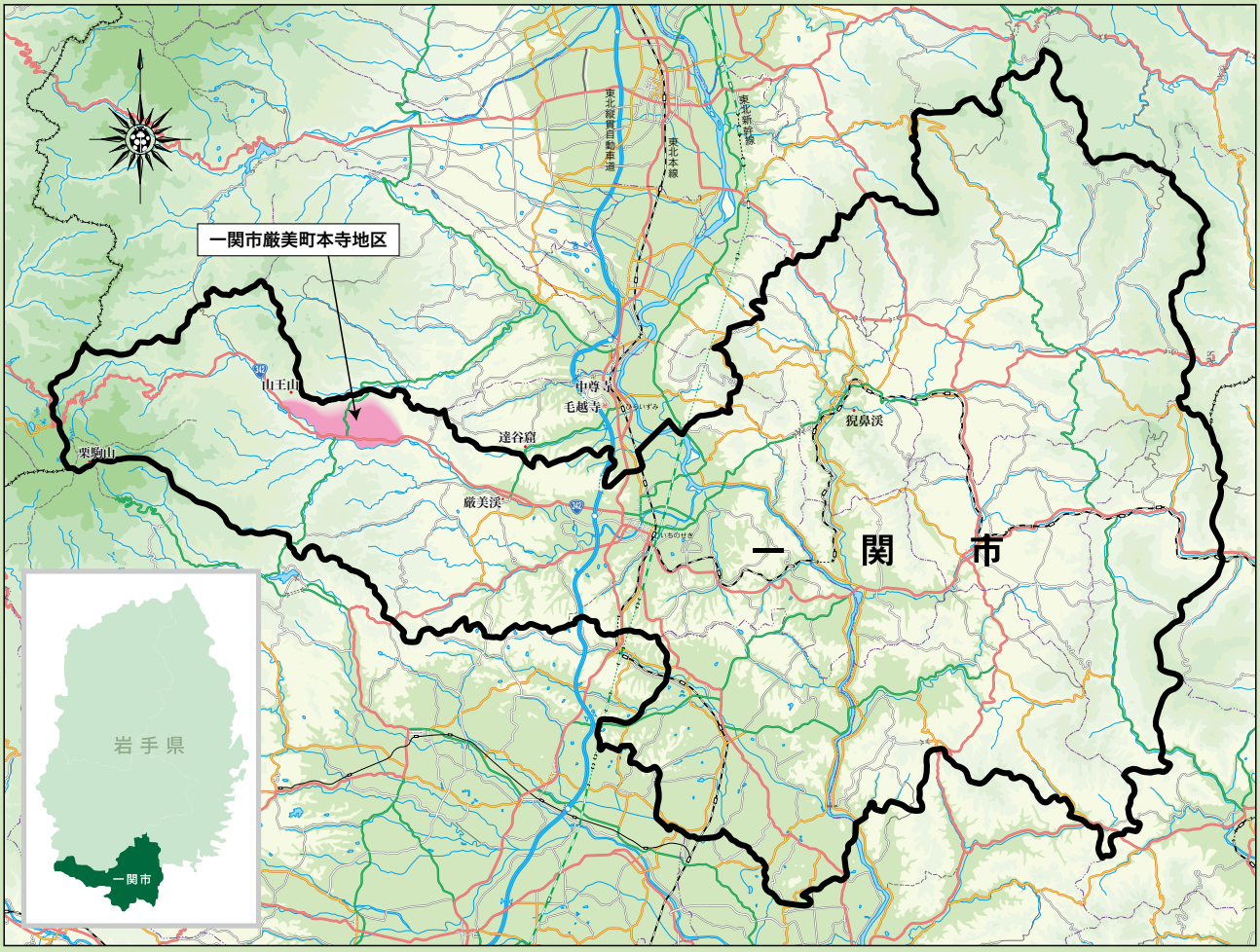
東側調査区で発見された性格不明の遺構

平泉野台地出土遺物（平成 23 年度）

調査報告会の風景



骨寺村荘園遺跡指定範囲図



骨寺村荘園遺跡位置図

国指定史跡　骨寺村荘園遺跡
— 平成 23 年度調査概要 —

【編集・発行】　一関市教育委員会　生涯学習文化課
岩手県一関市竹山町 7-2

【　印　刷　】　川嶋印刷株式会社
岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原 21

平成 24 年 3 月 30 日